

チェルノブイリに思いをよせて

ポレーシエ

新世紀を「希望」から始めましょう！

こんにちは、はるかなる友人たち
あなた方に心からの尊敬と、クリスマスと新年のお祝いを差し上げることは、特別な喜びです。

「蛇」が私たちの友情をいっそう固く結び付け、私たちの関係がより強く、深くなるように希望します。

私たちが知り合ったこの10年は、恐らく私たちの人生で最高でした。私たちはあなた方から、なじみの無い考え方や意見にも、敬意を払う事を教わりました。時として私たちはあなた方から「空のコップからお茶を飲み、石の成長を見つめること」を教えられました。

また、私たちはあなた方から「釣り針」の理論を教わり、それを魚を食べたいすべての人々に与えることを教えられました。…私たちがあなた方に教えたのは、「女性のための三杯目の乾杯だけ」ではない事を祈ります。

新世紀の幕が開き、再び私たちは運命を共に始めることになりました。どうやってスタートしましょうか？ たくさんの「困難」が待ち構えています。しかし、私たちは「希望」から始めようと思います。私たちのお祝いの言葉を、全てのメンバーにお伝えください。

私たちはあなた方を思い出し、あなた方のことを考え、あなた方のために乾杯します。
『カンパイ！』



2001年1月 移住基金
キリチャンスキー&ドンチェヴァ

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10
チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明
郵便振替：00880-7-108610
TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00~17:00）
E-メール：chachubu@muc.biglobe.ne.jp
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.com

2001年2月

ウクライナ訪問団

北野達也
松田幸枝
倉田節子

ウクライナによせる想い

事務局員 松田 幸枝

2001年2月のウクライナ専門家派遣に同行することになりました。

事務局員として、専門家の北野さんのサポートをするのが、私の第一の仕事ですが、もう一つ大切な仕事をしてきたいとの思いを強くしています。

日ごろ、事務局で、皆さまからのカンパ受け入れの業務をさせていただいて、振込用紙に込められた、皆さまのチェルノブイリの人々に寄せる思いを、ひしひしと感じています。これをなんとか、現地に伝えたいと願っていました。

今回、これを果たす機会をようやく得たと言うべきでしょうか。どれほど伝えられるか心もとないのですが、あらゆる機会を逃さずに、現地の被災者の方々、救援の窓口になっている人々などに伝えられたらと思って、4～5ページのようなメッセージを用意しました。

訪問団のスケジュール（予定）

訪問団のスケジュール（予定）	
2月9日（金）	名古屋空港発 フランクフルト着
2月10日（土）	フランクフルト発 キエフ着 ジトーミルへ
2月11日（日）	州立小児病院訪問
	北野さん
	倉田さん・松田さん
2月12日（月）	州立小児病院にて医療機器の修理（通訳竹内さん）
2月13日（火）	ナロジチへ…村と病院・教会を訪問 コーラステンへ…サクシュコさん家族を訪問 移住基金と話し合い
2月14日（水）	全員ブルシーロフ病院へ…建設中の新病棟見学・医療機器修理・移住者と懇談 スベトコール薬局訪問
2月15日（木）	州立小児病院または市立小児病院にて医療機器の修理
2月16日（金）	ジトーミル発 キエフ着 キエフ観光
2月17日（土）	キエフ発 ウィーン着
2月18日（日）	ウィーン発 フランクフルト経由関西空港へ
2月19日（月）	関西空港着

ウクライナ訪問にあたって

倉田 節子

「ウクライナに行っていない？」と原富男さんに言われ、「うん、行く」と軽く返事をしました。良かったのか悪かったのか、結果は2月19日、旅の終わりの日には、きっと出ていると思うのです。今はただ、分厚い言葉の壁をどう打ち破って、その後のかの地を目と耳と心をもって、いかに感じてくることができるか…何をどのように準備すればいいのか、ソワソワドキドキしています。

まだ見たことのない広大な自然は、きっと今ごろ白銀の世界だろうと想像します。やがて春になると、15年前と変わらない自然の営みが始まるのでしょうか。あのことさえなかったら…。人々は大地に種を蒔き、小鳥はさえずり、子ども達の歓声は大人達を喜ばせ…あのことさえなかったら…。

人類の犯した最大級の罪の現場に身を置くことによって、人間の愚かさを感じるのでしょいか？ 行ってまいります。ご支援くださる方々ありがとうございます。ちゃんと報告することをお約束いたします。

医療協力活動と自立支援を目指して・・・再びウクライナへ

臨床工学技士 北野 達也

今回、ウクライナへは2度目の渡航である。前回渡航時の課題として(1)医療機器の絶対数不足、(2)医療技術者等の専門家がおらず、院内医療機器が故障したまま使用不能状態、(3)人工呼吸器回路、気管カニューレ等の診療材料の不足、(4)州立小児病院における医療技術者の養成、(5)州立医科専門学校に医療技術科の設置 等々があげられた。

今回、これらの課題を一つ一つ解決すると同時に、寄贈医療機器の調査・稼働状況・メンテナンス・消耗部品の交換・院内医療機器全般のメンテナンス、そして現地のニーズにあった特殊疾患治療(各種血液疾患の治療・呼吸リハビリテーション等々)の臨床技術指導を行うと共に医療の質を高めつつ、経費削減案を提案するなどの現地に適した医療経営マネジメントを構築したいと願っている。中でも、前回私が州保健大臣に提案した「現地での医療技術者の養成」については期待されるものであり、治療拡大・生存率の向上・医療機器の安全適正使用・修理費用削減・故障減少・長期使用可能・病院経営(運営含む)状況改善のほか、現地にて被災者の就職先も確保できる。

ポレーシェNo.56にあった「生命を維持するための医療機器である人工呼吸器・保育器の台数が足りず、亡くなっていく乳児…。診療材料を購入するための費用が無く、再使用により感染症が発生している…。痛ましい現状…。この現状を改善したい!!

人は病に臥したとき希望を失ってしまう。足を地に着け、現実を見つめさせ、その中から微かな希望を見だし、その希望が半減しないようにと我々が手を差し伸べ、病を克服するのである。その希望と光を絶やさぬよう継続支援を行っていきたく願っている。…そして、更なる世代へ受け継がれていくことを願っている。

今回、訪問団として同行の倉田さん・松田さん、宜しく願いいたします。そして、力を合わせて「責務」という重い荷物を背負って行きます!

親愛なるウクライナの友達 チェルノブイリ事故の被災者の皆様へ

日本の友達からのメッセージ

1986年にチェルノブイリ原発事故が起きて、もうじき15年。事故のために健康を害し、苦しい生活を強いられてきた皆さんは、事故のことは忘れたいと思う一方、もう世界の人々は、自分達のことを忘れてしまったのではないかと絶望してはいませんか？ そんなことはありません。私達日本の市民は、皆さんのことをけっして忘れてはいません。私達「チェルノブイリ救援・中部」は、1990年から今まで10年の間、あなた方を忘れない日本の多くの市民がいるから続けることができました。皆さんのことを支援し続けている私達の国の市民の気持ちをお知らせするために、このメッセージが書かれました。

1945年に日本の広島と長崎に落とされた原子爆弾によって、約20万人が死にました。生き残った被爆者達も、その後亡くなったり、さまざまな病気に今でも苦しんでいます。日本人の多くはこのことを怒り、心を痛め、ずっと忘れないでいます。さらに、日本には多くの原子力発電所があり、大小の事故が続いて怒っています。ですからチェルノブイリ事故は他人事と思えないのです。これらの理由から日本の市民の多くは、あなた方のことを忘れることができないのです。

豊かになった日本でも、金持ちではない普通の生活をしている市民がほとんどです。また長く病気に苦しんでいる人、障害者、年金だけで暮らしている老人なども大勢います。こういった人達が、皆さんのことを心から気遣っていて、できる限りの支援をしてくれるのです。自ら苦しみを知る人こそ、他の人々の痛みを理解することができるのではないでしょうか。

今までに寄せられた寄附の数は次の通りです。

1990年から1994年までは正確な記録がありません。推計で、5年間で6500件を超えられると思われます。1995年-1259件、1996年-1398件、1997年-1187件、1998年-1255件、1999年-1123件、2000年(9月まで)-451件。



そうです、平均して毎月100人以上の人が、あなた方のためにお金を送ってくれるのです。これらの中には勿論、一人で何回も送ってくれた人がたくさんいます。職場、学校、サークル、小さなグループもあります。この中の何人かをご紹介します。

O・Eさん — 彼女は重いリュウマチを患っています。ほとんど全身が動かなくて、わずかに指の先で細い棒を動かすことができます。できることだけは自分でして、妹さんの家族やヘルパーの助けを借りて、一人で暮らしています。こんな彼女が、もう10年の間、あなた方が良い治療をお医者さんから受けられるようにと願って、ウクライナのお医者さんが研修するためのお金を送り続けてくれます。そのお金の一部は、ウクライナの赤ちゃん達にあげるミルク代にも使ってくださいとも言っています。

N・Yさん — 彼女は、目の病気のためによく見えません。けれども懸命に自分で子どもを育てています。チェルノブイリ事故のために自分と同じように目が不自由になった人々のことを知って、毎年寄附金をくれます。目の悪い人がどうか回復してほしいと願っているのです。

I・Mさん — 彼女は、日本のどこにでもいる心やさしい主婦です。暑い季節も寒い季節もあなた方を気遣っていて、お金とメッセージを送ってくれます。このような方が、まだ他にもたくさんいます。

T・Mさん — 彼女は、1995年に阪神大震災という悲劇に遭いました。その時支援に行った「救援・中部」と知り合いました。彼女は地震後、自分の町に帰りましたが、同じような災難に遭ったあなた方のことを心から痛ましく思い、お金を節約して何度も送ってくれました。

静岡星美小学校 — ここはクリスチャンの学校です。子ども達はある期間、週に一度、お昼ご飯のおかずを無しで我慢するのです。こうして集めたお金を、皆さんのお子さん達のために使ってほしいと願っています。彼らはあなた方の赤ちゃんにあげるミルクの缶に貼るラベルに、励ましの絵や言葉をかいてくれます。また空き缶を集めて売り、そのお金で車椅子を買って毎年贈ってくれます。

長良養護学校 — ここは体の不自由な子ども達のための学校です。障害の程度も様々で、学校の隣にある病院から通学している子もいます。彼らは5年間、春のバザーと秋の文化祭に募金をして贈ってくれます。自らがそうであるからこそ、彼らはあなた方の苦しみや痛みがよく分かるのでしょう。私達はいつも彼らから励ましを与えられています。

私達日本の市民の多くが、自分達の平和をあなた方に分かちたいと心から願っています。私達は何が皆さんにとって最も必要なのか？と考えた結果、病院に医療機器、医薬品、子ども達に粉ミルク、障害者に車椅子などを送ってきました。私達の皆さんへの支援は決して多くはありませんが、途絶えることなく続けることが大事だと思っています。これからも出来る限り続けます。

(松田)

先号でもふれたが、チェルノブイリ原発は事故から 15 年目にしてやっと全面閉鎖された。しかし、これで問題が解決された訳ではない。ウクライナでは、チェルノブイリの閉鎖と引き替えに、資金難のため建設途中で止まっていた別の原発 2 基の完成を目指す動きがある。その資金源は原発継続を謀る西側先進国である。自国での脱原発とは裏腹に海外で原発建設をすすめるのは単純に利益追求のためである。

日本は、先進工業国の中では最も脱原発の遅れた国になってしまった。昨年末策定された「長期エネルギー計画」では世界中が見捨てた核燃料サイクルの継続を基本にし、今後も原子力をエネルギー政策の柱にすることになった。そもそも、燃えないウラン 238 を、燃えるプルトニウム 239 に変換し、核燃料資源を技術の力で現在の約 100 倍に増やす、という高速増殖炉を中心とした核燃料サイクルは 1950 年代の原子力開発当初の発想であり、アメリカではカーター大統領の時代に放棄され、他のヨーロッパ各国でも先世紀中に放棄された代物である。理由は単純である。「もんじゅ」のプルトニウム倍増能力は、95 年かかってやっと 2 倍である。これでは原子炉の存命中に次の燃料は間に合わない。「もんじゅ」だけではない。世界でもっとも開発が進んでいるといわれながら廃炉が決まったフランスのスーパー・フェニックスのプルトニウム倍増時間は、無限時間すなわち永久に増えない。ドイツのやはり廃炉が決まったカルカー原発はプルトニウム減少、現在世界で唯一稼働中のロシアの BN600 は約 130 年、東海村 JCO 事故の原因になった日本の研究炉「常陽」は約 300 年である。すなわち、世界中にプルトニウムが現実的に増殖した高速増殖炉など一つもない。原子力推進派は「今はそうだが、技術が進めば解決出来る。だからもんじゅの運転再開を」と主張する。この主張は昨年「もんじゅ裁判」でも判決に採用され、原告住民敗訴の理由になった。少し専門的になるが、プルトニウムの増殖能力を上げようとすれば、炉心を今よりもますます高密度化し、炉心プルトニウム濃度を上げ



高速増殖炉もんじゅ：福島県敦賀市

なければならぬ。これは炉心を限りなく核容器に近づけ、制御を困難にすることに他ならない。他の小手先の技術開発では解決不可能である。専門家はこうした現実を国民に「隠して」いるのではないか。政治家は何も知らずに原子力を「信じて」いるのではないか。海外諸国が脱原発に踏み出したのは、原発の経済性や危険性ばかりではない。原子力が未来のエネルギーたりえない、と分かったからである。

とはいえ、日本でも確実に原発に対する国民の感情は離反しつつある。JCO 事故がきっかけではあるが、現実に原子力に代わるエネルギー源が出現しつつあるからである。新たな世紀は原子力に象徴される巨大発電所ではなく、小規模分散型発電所が主役の座を奪うであろう。ドイツではすでに、風力発電が原発 3 基分の電気を作っている。アメリカの某大手石油会社は石油を新世紀のエネルギー戦略と位置づけている。太陽エネルギーばかりでなく、「燃料電池」と云われる新たな電源の開発も急ピッチである。2~3 年以内に、日本でも家庭用燃料電池は販売される見通しである。各家庭にガス配管が来ている日本は世界で最も燃料電池普及に適した国である。電力会社が勧める「全てが電化した高級マンション（ガス配管のない）」は最も遅れたエネルギー・システムになる。日本に欠けているのは、長期的な見通しに立ったエネルギー戦略とそれに基づく政策である。過去を引きずったまま 21 世紀を生き残ることは出来ない。

(河田昌東)

第2期 ウクライナ講座 はじまりま〜す！！

お待たせしました！ いよいよ2月17日（土）からウクライナ講座が始まります。前号でお知らせしましたように、第1回はウクライナのピーサンキ（イースター・エッグ）の絵付け教室です。

ピーサンキは、ウクライナに伝わる復活祭（英語で言うイースター、4月）を祝う卵（イースター・エッグ）です。とてもカラフルに細かな模様をほどこしたかわいいものです。

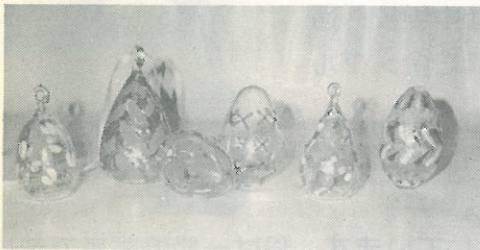
信仰がある人もない人も、ウクライナの伝統文化に触れてみませんか？

本来は、卵に絵付けするものですが、木製の卵に絵を付けたものがウクライナのみやげ物として売られています。今回は、そこをちょっと工夫して、ガラスの卵に絵を付けることにしました。

講師はガラス工芸をやっている榎本恭子さん（右写真）です。

榎本さんは、第2次スタティ・ツアーに参加され、その時ウクライナでこのピーサンキを手にして、今回の絵付け教室のアイデアを持たれたそうです。

みなさんもぜひ、ウクライナの伝統を参考に、オリジナルなピーサンキ（1個ならピーサンカ）を作ってみませんか。



と き：2月17日（土）13：30～16：00

と ころ：なごやYWCA（名古屋市栄）

参加費：1000円（材料費込み。ただし

2個目からはプラス500円）

持ち物：細筆、タオル、エプロン

申し込み：救援・中部事務局まで

第3次 チェルノブイリ救援・スタティ・ツアーに行きませんか！？

これも前号でお知らせしましたが、ツアーのスケジュールなど内容が決まりつつあります。主な日程はつぎのとおり（今のところまだ確定ではありません）。

9月18日（火）関西または名古屋空港発。フランクフルト（またはウィーン）泊。

19日（水）フランクフルト発。ウクライナ キエフ着。ジトーミル着。

20日（木）ジトーミル散策。

21日（金）ナロジチ・チェルノブイリ博物館、消防局訪問。

22日（土）現地にて日本デー。講演会や写真、パネル展示などの市民交流。

23日（日）フリー。バザールショッピングなど。

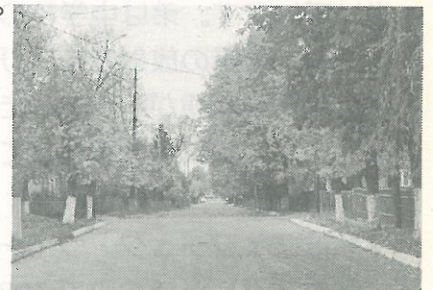
24日（月）ブルシーロフ病院訪問。

25日（火）キエフ観光。聖ソフィア寺院や
アンドレイ坂散策など。

26日（水）キエフ発。フランクフルト
（またはウィーン）泊

27日（木）フランクフルト発。

28日（金）関空または名古屋空港着。



※費用は安く、約26万円程度に抑えたいと思っていますので、多数のご参加を！（K）

奨学生からの手紙

私は、クリヴォイ・オレーナです。

オレフスクで1982年8月14日に生まれました。

1988年から1999年までオレフスクの第三学校で学び、成績が優秀だったので金メダルで卒業しました。私はクラスの学級委員でした。先生になりたかったので、1999年にジトーミル教育大学の言語学部に入學しました。私の夢は、読書がとても好きなので、自分の小さい図書館を持つことです。

私には心筋硬化症や消化器系などの健康上の問題があります。私の家族を紹介します。母は1957年生まれで、オレフスク第10学校の簿記係です。父は1956年生まれで鉄道駅で電気技師として働いています。両親は離婚していて母だけが私を財政的に支援しています。私の妹ナタリアは第3学校の7年生です。

* * * * *

私はバシンスカヤ・インナです。

私は1981年4月12日にコロステンで、労働者と教師を両親とする家庭に生まれました。1988年にコロステンの第4中学校へ通っていましたが、途中第12中学校へ転校し、1988年に金メダルで卒業しました。

1988年から1999年はジトーミル教育大学の予備学部の生徒でしたが、今は教育大学の外国語学部で勉強しています。

現在第12学校の警備員として働いている父と暮らしています。母は一級障害者で苦しんでいましたが、1999年5月に亡くなりました。

* * * * *

私はコルツォベツ・アンジェラです。

1981年8月23日にオレフスクの村で生まれました。

1998年に中学校を卒業し、ジトーミル教育大学の予備学部に入學しました。その学部を卒業後、教育大学の物理数学部の学生になりました。

父はアスファルト工場の運転手として働き、母は店の店員として働いています。弟は中学校の9年生ですが、チェルノブイリ原発事故の後、多量の放射能を浴びたために、神経系に障害を受けました。そして精神状態が不安定なためとても神経質で、クラスメートと付き合うのはとても難しく、自力で学校の勉強をしています。

* * * * *

私はチェプチュク・ヴィータです。

私はプリピャチの町で1982年2月23日に労働者の家庭に生まれました。1986年のチェルノブイリ事故の後、私は二級障害者となり、ジトーミルに引越しました。



1988年から1995年はジトール第34学校で勉強しました。1996年にジトール教育高校に入学し、銀メダルで卒業しました。そこでの勉強をしながら学力コンテストに参加し、生物学で3位になりました。陸上競技にも参加しましたが、病気のためにトレーニングを中止しなければなりません。1999年にはジトール教育大学の自然学部に入りました。父は錠前師で母は幼稚園で助言者をしています。妹は教育大学心理学部第2コースの学生です。

* * * * *

私はザヴァリッチ・ナタリアです。

私はリヴォフオブラストの町で1981年9月7日に生まれました。1987年にステフニクの第7学校に入学しました。1989年に家庭環境のために私の家族は引っ越しました。在学中は校内活動に積極的にウクライナ語と法律のそれぞれのコンテストに参加しました。

1997年に私は音楽学校のバイオリンのクラスを卒業しました。7年間陸上競技もやりました。1998年に村の中学校を金メダルで卒業し、1999年9月からはジトール教育大学の小学校教師学部の学生です。私の両親は離婚しました。父は家族と暮らしていません。父からは何の援助も受けていません。母は検査官をしています。姉のタチアナは結婚し一児の母ですが、現在産休中です。

* * * * *

私は、ジトール医学校の生徒オクサナ・イワンチェンコです。

みなさまに奨学金への心からの感謝とクリスマスと新年のご挨拶を申し上げます。晴れた空のように大きく果てしない幸せと、ご健康とご成功とお仕事と個人的な生活にも良いことがありますように祈っております。

私は自分の目的に近づこうと努力しています。健康は優れませんが、でも病気が悪化しないように気をつけています。でも、家族の状況はとても悪いです。この秋におばあさんが亡くなり、私は妹と弟だけになってしまいました。かつてのような温かいことはもうなくなり、小さな妹弟だけが私を待っています。彼らを育てるのはとても大変です。なぜなら私はまだ学生ですし、彼らに与えるものは何もないからです。奨学金がなかったら、どうやって暮らしていけるのか想像もできません。奨学金は私の食費には充分ですが、衣類や靴…問題外です。妹のためにはお金をかきあつめることができても、二人目となると…お金は無く、自分から沈黙を守ってしまいます。何年も前に買った服を今も着ていますが、新しいものとなったら…数えることもできません。他からの援助なしにはとても困難なのです。でも、良い生活がきっと来る、そうすれば楽になれる…と希望を持っていますが…でもそれはすぐにはやって来ないでしょう。

ご親切とご支援本当にありがとうございます。お幸せに。



*



*



悪弊繰り返すウクライナ

ジャーナリスト リュボフ・コバレフスカヤさん
 チェルノブイリの事故から14年がたち、ウクライナが悲願の独立を果たしてから来年で10年になる。この間、わが国では旧ソ連時代について厳しい批判が聞かれたが、実は過去の悪弊は繰り返され続けている。

ソ連ではエネルギーが過剰に生産されていた。国民一人当たりの発電量は毎時6,000kWにもなっていたが、その3割しか使われなかった。非効率的な供給体制のため、資源が浪費されていた。

独立したウクライナが、西側の援助を得て、本当にしなくてははいけなかったのは、節電技術を導入した効率のいいエネルギー運用であった。しかし、わが国政府のエネルギー政策は一貫性を欠いた。独立した1991年に議会は、原発の新規建設を凍結する決定をした。92年にはチェルノブイリ原発を93年末までに閉鎖することも決めた。だが、93年になると議会はこれらの決定を覆した。理由はエネルギー不足の顕著化だった。

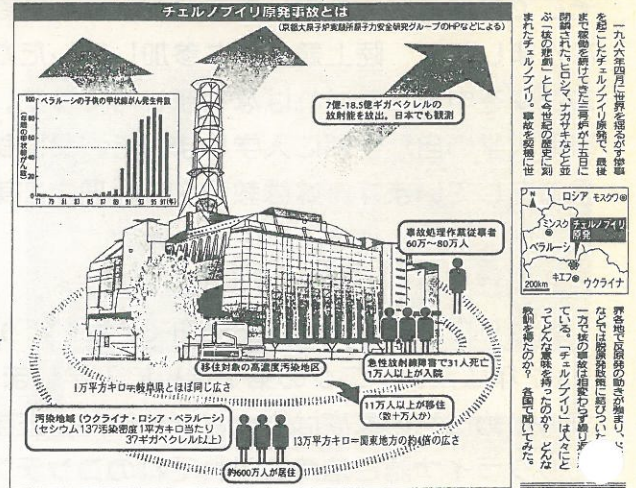
クチマ大統領は94年になると、原発の新規建設を決めた。しかも秘密裏に。米国からは風力発電所の建設が提案されたのに、政府はこれを拒絶した。西側は二転三転するウクライナの姿勢に不信感を強めた。

G7（先進7カ国）の核安全作業グループが94年から調査した結果、ウクライナの発電所は、燃料の供給体制の問題などからその能力が十分活用されていないと分かった。このようなアンバランスな体制で、新規原発を造っても状況の根本的解決にはならない。

しかし、結局はチェルノブイリ原発の代替原発が造られようとしている。チェルノブイリの悲劇を生んだソ連の非合理的、非効率的な体制には何らの改革も施されないままなのだ。世界は事故から多くの教訓を得た。だが、わが国は何も学んでいないのだ。

(2000.12.23 中日新聞)

「チェルノブイリ」14年 世界に教訓は



<コバレフスカヤさん宅にて(2000.10.12)>

リュボフ・コバレフスカヤさん
 キエフ在住の女流作家、ジャーナリスト。チェルノブイリ原発そばにあったプリピャチ市の元住民で、事故直後に強制移住させられた。被曝による甲状腺異常などに苦しみながらも、「チェルノブイリの語り部」として文筆活動を続けている。

竹内さんのウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部)

ウクライナ駐在 竹内高明)

(2000.12.22)

12月15日の朝に、国営TV第1チャンネルで『リュボーフィ・コヴァレフスカヤのチェルノブイリ』なる15分番組があり、私のインタビューも30秒くらい映りました。しかし金曜朝9時台、つまらないことで定評のある国営第1チャンネルの放送とあって、今に至るも「見ましたよ」と言ってくれた人は日本人留学生一人のみ。ま、私はなんか間の抜けた顔で映ってた(というより根が間抜け顔なのか)ので、誰にも気づかれず、ほっとしているというのが本心ですが。

この前後、新聞・TVでチェルノブイリ関係報道はかまびすしく、コヴァレフスカヤ氏も精力的に記事を書いていました。

中日新聞の星さんは12日キエフに来、13日私の紹介した人(石棺内部の点検作業を5年間行っていた原発建設技師)のインタビューをやりました。記事になったでしょうか?(注:右上の記事が、2000.12.23の中日新聞に掲載されました。)

(2001.1.19)

昨年末からの「クチマゲート」事件(インターネット上のプレスで、大統領と某財閥の癒着を攻撃していたゴンガゼ記者が行方不明となり、キエフ郊外の森で彼のものとみなされる一調査続行中―首無し死体が発見された。このゴンガゼ氏の暗殺指令を大統領が出したとして、その証拠とされる盗聴テープが議会に提出された)、それに続く、エネルギー問題担当副首相ユーリヤ・ティモシェンコの、最高検察庁による告発(「ウクライナ統合エネルギーシステム社」社長時代に(1996年)、ロシアのガスを30億立方メートル、書類を偽造して密輸入、多額の脱税をした容疑)というスキャンダルがマスコミをにぎわせていますが、一般市民はさめた反応を見せています。これらのニュースが日本でどの程度報道されているのか、私はよく知らないのですが…。

最近の気温は-2℃くらい、粉雪がちらつく程度です。グリヴナ・レートは少しずつ下がっており、1ドル=5.64グリヴナに至りました。

山口の「ドゥルージバの会」に招待され、キエフの少年少女合唱アンサンブルと訪日していたシェフチェンコ先生(昨年末キエフに帰ってきた)によると、このアンサンブルのCDを製作し利益を支援に充てる計画があるそうで、民謡の歌詞の日本語訳等を私も少し手伝いました。というわけで、現在(1月末まで)大学は冬休みですが、あれこれこまごました用事をこなしています。

仲間の280人が死亡 ロシア

事故処理作業に従事したある労働者赤旗勲章をもらった。もう一つは、英雄に炭坑作業員、アンドレイ・ナソノフさん(50)の事故で死んでもいいというほど直後に現地に連れて行かれ、約三時間働いた。ツィラには同じような作業をした仲間が二千六百人以上いたが、そのうち約千六百人が障害者になった。二百八十人はもう死んだ。私は、作業での功勞が認められてソ連では大変名譽(モスクワ・星浩)

ある労働者赤旗勲章をもらった。もう一つは、英雄になれたのだから、もうこれで死んでもいいというほどうれしかった。それが今、事故処理作業員たちへの福祉も切り詰められようとしている。抗議のために、勲章はクレムリンわきの広場に捨ててやった。やり切れない、としか言いようがない。

日ーウ ホットライン

救援・中部 運営委員会の皆様へ (ウクライナ→日本へ) 2000.12.08

こちらの討論の結果をお知らせします。

第1の問題：チェルノブイリ原発閉鎖という政治的決定の重要性を理解はするものの、二つの理由からタイムリーではないと考えます。

- 1) 12月 は暖房の季節であり1kWでも金に値する。国中の電力の7%が減少する。それは予算を厳しくし、エネルギー不足を招き、電力のための新たな国家の負債をもたらします。
- 2) チェルノブイリの代わりとなる二つの原発を完成させる為の援助を、世界に求めてはいません。放射能レベルの管理の問題、原発労働者の仕事の問題など、チェルノブイリの本当の問題は原発が閉鎖されてから始まるでしょう。

第2の問題：私たちは(1000万円プロジェクトの)参加団体のうち、国立小児病院・市立小児病院・診断センター・デネシサナトリウム、これらのプログラムは慎重に考慮され、具体化されていると考えます。

移住基金 委員会の皆様へ (日本→ウクライナへ) 2000.12.18

こんにちは。1000万円プロジェクトに関しては、12月2日に名古屋で行われた運営委員会で、国立小児病院(二つの計画)・市立小児病院・診断センター・デネシサナトリウム・ナロジチ病院・事故処理作業員協会・障害者協会の全ての計画案を詳細に検討しました。私達は、あなた方と全ての応募団体に、私達の意図と考えを十分理解させることができなかつたと結論しました。

提出された全ての計画は、既存の設備やシステムの単なる延長か拡張としてしか書かれていません。新しいプログラムは、被災者が将来の生活において自立する為の手段となるものにすべきです。すなわち、お金は魚ではなく釣り針のために生かされなければなりません。

皆さんは、がっかりされるかもしれませんが、上記の理由で、私たちは熱心な討論のあと、全ての応募された計画をいったん差し戻すことにしました。

救援・中部 運営委員会の皆様へ (ウクライナ→日本へ) 2001.01.02

こんにちは。12月25日、私たちは運営委員会を開き、このプロジェクトに関するあなた方からのメモとセッションについて討論しました。このお金の使用目的に関し、「私たちは具体的なことを知らされていなかった」という点を確認しました。「釣り針」の原則について、どこの病院もスポンサーや州の予算で自身の問題を解決してきました。ですから、「病院が何もしてこなかった」とあなた方は考えるべきではありません。病院は(州の予算で賄われているので)独立しては存続できません。それは治療費で(経営が)賄われるようになる時だけでしょう。今日、どこの病院も州の援助なしには存続できません。例外はデネシサナトリウムです。全てが自己資金で賄われ、子ども達の治療費を下げているのです。「釣り針」はサナトリウムの建物、そんなわけで私たちはデネシサナトリウムが1000万円プロジェクトに最も適していると考えます。

お金を偽って必要だという人は誰もいません。あなた方も分かるように、彼らはより良い生活のためでなく、貧困の故にあなた方に援助を求めました。プロジェクト作成についてのあなた方からの提案、エネルギーシステムについて。こちらは風が強くないし、冬季を考えれば太陽も日本のようにホットではないのです。

キラチャンスキー

PS. クリスマス・カード2箱をすでに受け取りました。大変感謝します。これらは病院や協会に配布しました。新年の祝福ありがとうございます。(熱いバトルは続く…)

救援物資をご寄付ください！！

「原発閉鎖により世界はチェルノブイリにサヨナラを言い、ウクライナ政府は被災者・失業者にサヨナラを言う。政府はチェルノブイリ問題を忘れたいのだ」……原発廃止に伴い、ウクライナ政府は2001年度予算のうち、チェルノブイリ関連予算（補助金）を30%カットするといひます。また、世帯主を失った妻・子ども達の医療費・学校教育費・給食費免除の削減、放射線後遺障害で苦しむ子ども達の「特典」＝当然なされるべき補償＝の一部廃止等が報じられました。それまでの対策・補償でさえまならなかつたにもかかわらず、それを削減・廃止ということひです。「チェルノブイリ」は終わるどころか、その被災者はますます過酷な状況に追いこまれていくのが目に見えているといえるでしょう。私達の活動が岩を穿つ一滴の水でしかなくとも、できることをやっけていきたいと思ひます。

さて、昨年から寄付して頂ひた救援用の車椅子、保育器を2月にコンテナに載せ船便で現地へ送りまひす。保育器が4台、車椅子が12台です。車椅子は事故処理作業員の障害を持っておられる方々に、また保育器は、病院で障害のある重篤な病気の子や未熟児にとって不可欠なものですが、圧倒的に不足してひます。船に載せるコンテナにはまだまだ余裕があります。車椅子や保育器は中古でも確実に使用可能なものでしたら結構です。ご寄付をお願いいたひます。

☆救援物資の種類……車椅子、使い捨て注射器（使用期限が半年以上残っているもの）、毛布（新品）、シーツ（新品）、医療消耗品（事務局にお問ひ合わせの上お送りください）

尚、これらは2月末に船便で送る予定ですので、2月20日までに事務局へお届けて頂きたいと思ひまひす。また、事務局へ送られる前にご一報ください。よろしくお願ひいたします。（山盛）

静岡星美小学校訪問記

昨年12月16日に清水市にある静岡星美小学校に行つて来まひました。

ご存じのように星美小学校は、チェル救が活動を始めたときから、ミルクキャンペーンとカードキャンペーンを中心にずっと協力を戴いている縁の深い学校です。この日はクリスマス会、催しの一部として寄付の授与式があり、招待されました。私自身ははじめての訪問でした。

4年生全員出演の劇とクリスマスのセレモニー、校長先生のお話があつて、最後に授与式がありました。チェル救は、子どもたちがアルミ缶を回収して作つたお金で買った車椅子1台と後援会からの寄付金15万円を戴きました。カードキャンペーンのクリスマスカードも戴きました（このほかに星美小学校からは昨年6月にミルク代15万円を戴いています）。

クリスマス会のあと、野中先生と吉平先生からお話を伺ひました。そのなかで、これからもチェルノブイリ事故被災者救援に取り組んでいくつもりであること、ウクライナから来訪者があれば星美小学校でも交流会を持ちたいことなどを話されました。私たちの活動は、多くの人びとの厚意とこころざしによって支えられていることを改めて噛みしめた一日でした。99年のスタディ・ツアーに参加された山根田鶴子さんにもお目に掛かりました。（田中良明）



事務局だより

☆「2000年カードキャンペーン」へのご協力ありがとうございました。
900枚ものカードが事務所に届きました。

1年かかってお店で集めたというミルクカンパの入った「ミルク缶貯金箱」とともに、手作りカードを岡崎から届けてくださったAさんとMさん。「今年は若い人達が気合を入れて作りました」と、カラフルな温かいカードを見せてくださいました。また、名古屋学生青年センターでの子どもクリスマス会(右の写真)では、50名程の子ども達が、チェルノブイリの話に耳を傾け、おこづかいをミルク代にと集め、そしてカード作りをしてくれました。とりどりの力作ばかり。



これをよんでげんきになってね。…こんにちは、ぼくは日本人のやすのりです。9さいの、いつも「やっちゃん」と、お友だちからいわれます。こっちはへいわの1日です。そっちはたいへんですか。ぼくはがっこうのせいせきは、中かんの、トップです。でも1つなやみがあります。でも、それは言えません。あともうすこしで、クリスマスです。こっちのへいわをそっちに、おくりたいぐらいです。くるしい中ががんばってください。メリークリスマス

「やっちゃん」の、心からのカードは、きっとチェルノブイリの子ども達の心に届いていることでしょう。たくさん学校の・教会・絵画教室、そして個人の方々から贈られたカードは、小児病院、孤児院や事故処理作業者の子ども達に届けられました。

☆「ミルクキャンペーン」へのご協力ありがとうございました。

去年同様 450万円を粉ミルクとフェニールケトン尿症用特殊ミルク購入費として送金します。去年は州立小児病院、市立小児病院だけで7500人程の子ども達がこのミルクを受け取りました。大切な「命の糧」となっています。今年もこの2つの病院と州立孤児院(孤児と扶養能力のない親の子どもの州立の家)等に粉ミルクを、また、遺伝学センターに特殊ミルクを贈ります。

<http://www.chernobyl-chubu-jp.com>

チェルノブイリ救援・中部へ ようこそ

◎ホームページ開設のお知らせ

今まで、岡崎の伊藤さんのホームページをお借りして、救援・中部の紹介を載せていただいていたのですが、ソニアの塚本さんと事務局長が、忙しい合間を縫ってコンピューターを「叱咤激励」??しながら、チェル救独自のホームページを立ち上げました。

写真満載。是非アクセスしてみてください。また、ご意見・ご感想をお寄せください。本年も救援へのご協力よろしく願いいたします。

(山盛)

編集後記

- ☆灯油の減りが早い! エレベーターのないアパートの3階に住んでいるため、灯油を持って階段を上がる。ドラマならキムタクが現れ「持とうか?」って言うってくれるのに。(佳)
- ☆広い世界、民族の差異はどこから来る? 気候・風土、歴史や政治、宗教・社会状況、はたまた狩猟・肉食、農耕・菜食、いろんな違いがあるのだもの、互いに分かり合う努力は当然だ。(京)
- ☆15年前に書いたという手紙が届けられた。15年後の家族を気遣う母からの手紙だ。読むうちに文字がにじむ…父も喜寿を迎えた。これからも健康で生きていてほしいと願う。(美)
- ☆新年・新世紀・新千年紀を迎えた。新たな気持ちになると、それまで以上の勇気と行動力がわいてくるものだ。脱原発は必ず実現する。(J)